

人工股関節置換術患者の回復過程 および生活の満足度に関する研究

— 2年以上経過例の現状 —

平松 知子 泉 キヨ子 鈴木 泰子*
松本 忠美** 久内 清美*** 葛城千世子***

KEY WORDS

Patient with total hip arthroplasty, Daily routine movements, Quality of life, Recovery process, Anxiety due to hip joint

はじめに

われわれは、人工股関節置換術患者の継続看護に有効な手段を明らかにするために、退院後の日常生活の回復過程に関する研究を行っている。日常生活関連動作は、経時的に回復し術後1年でほぼ回復する者が多いことを報告した¹⁾が、長期経過例の報告は少ない。

今回は、術後2年以上経過した人工股関節置換術患者の日常生活関連動作と、QOL、股関節に関する気がかりの現状について分析した。

研究方法

1. 対象は、K大学医学部附属病院で人工股関節置換術を受け、2年以上経過した患者のうち術後経過を追跡できた82名(男性9名、女性73名)である。術後経過期間は25~82ヵ月、平均44ヵ月、年齢は34~79歳、平均57.9歳であった。

2. 調査方法は、自記式郵送法にてアンケート調査を行い、日常生活関連動作の回復状況やQOL、股関節の気がかりについて生活のとらえ方別に検討した。ここで、生活の捉らえ方とは、股関節の疾患の影響を考えて日常生活がどれくらい自分でできているかの個人の感じ方とした。

3. 測定用具

1) 日常生活関連動作：股関節に負担の多い動作

である11項目、すなわち、腰掛け、ズボン着脱、入浴、正座、座っておじぎ、椅子からの立上がり、しゃがみこみ、靴下着脱、足指の爪切り、階段昇降、バス乗降について調査した。評価は、自立を3点、部分介助を2点、全介助または不能を1点とした。

2) QOL：術後の生活の満足度を測定するために、Modified Arthritides Impact Measurement Scale²⁾を日本語に訳したものをを用いた。これは人工股関節置換術患者の身体的・社会的・精神的安寧を測定するスケールであり、健康感、手術の満足度などを加えた56項目の質問から成る。サブスケールは、可動性、身体活動、ADL、社会活動、痛み、不安、抑うつ³⁾の8項目である。評価は、術後良好な反応を+1点、術前後で変化なしを0点、悪化した反応を-1点とした。

結 果

1. 生活のとらえ方

対象82名の生活のとらえ方は、とてもうまくやっている(以下A群)17名(22%)、うまくやっている(以下B群)24名(30%)、なんとかやっている(以下C群)38名(48%)であった。とてもむずかしい、または、むずかしいと答えた者はなかった。

2. 生活のとらえ方別対象の特性

生活のとらえ方別対象の特性を表1に示した。年

金沢大学医療技術短期大学部・看護学科

* 日本赤十字看護大学大学院・院生

** 金沢大学医学部・整形外科

*** 金沢大学医学部附属病院・看護部

表1 “生活のとらえ方”別にみた対象の特性

	A群 とてもうまく やっている n=17	B群 うまく やっている n=24	C群 なんとか やっている n=38
年齢(歳)	54.9±8.0 ¹⁾	55.8±10.0	61.2±10.9*
基礎疾患			
変形性股関節症	16	16	25
大腿骨骨頭壊死	1	3	3
大腿骨頸部骨折	0	3	1
慢性関節リウマチ	0	0	4
その他(再手術)	0	2	5
手術前後の職業の変化			
有一有	6	13	11
有一無	3	5	8
無一無	8	6	19
杖使用 あり	4	6	19*
なし	13	17	17

¹⁾ 平均±標準偏差 * p<0.05

表2 “生活のとらえ方”別にみた生活の満足度

	A群 とてもうまく やっている n=17	B群 うまく やっている n=24	C群 なんとか やっている n=38
トータルスコア	15.6±2.2 ¹⁾	17.3±2.8	3.3±2.3**
サブスケール			
社会役割	2.9±2.0	3.0±0.5	0.8±0.6**
身体活動	3.1±1.7	2.6±0.6	0.2±0.5**
不安	2.3±2.3	2.8±0.6	0.2±0.5**
抑うつ	1.6±1.9	2.1±0.6	-0.2±0.4**
可動性	1.5±1.3	1.4±0.4	0.0±0.4**
ADL	1.4±1.6	1.7±0.4	0.3±0.4*
社会活動	0.6±1.2	1.2±0.3	-0.2±0.3*
痛み	2.4±0.8	2.5±0.1	2.3±0.2
健康(術前との比較)			
改善	14	18	22
不変	3	5	7
悪化	0	1	4
手術の満足度			
とても満足	14	15	20
満足	3	7	9
失望	0	1	3

¹⁾ 平均±標準偏差 * p<0.01, ** 0.01≤p<0.05

年齢は、C群が他の2群に比べて高く有意差がみられた。疾患は、3群とも変形性股関節症が最も多く、特にA群は17名中16名を占めた。慢性関節リウマチは少数ではあるが全員C群であった。職業は、3群とも約20%が術後無職となっていた。B群は他の2群に比べて術前後とも有職が多かった。杖使用は、C群が他の2群に比べて多く有意差がみられた。性、術後経過期間による差はなかった。

3. 生活のとらえ方別日常生活関連動作

生活のとらえ方別日常生活関連動作について3群

を比較すると、A群は11項目すべて自立していた。B群は、しゃがみこみと正座の2項目以外はほぼ自立していた。C群は他の2群と比べて、腰掛け、ズボン着脱、入浴、椅子からの立上がり以外の7項目の自立度は低く、特にしゃがみこみと正座の自立度は低かった。

4. 生活のとらえ方別生活の満足度

生活のとらえ方別生活の満足度を表2に示した。トータルスコアはA群15.6、B群17.3、C群3.3であり、有意差がみられた。

表3 “生活のとらえ方”別にみた生活の満足度

	A群 とてもうまく やっている n=17	B群 うまく やっている n=24	C群 なんとか やっている n=38
気がかり あり	8	12	26
なし	7	11	10
気がかりの内容 (複数回答)			
耐用年数	3	2	3
対側股関節への負担	2	2	4
術部以外関節の痛み	1	3	4
術部の痛み	2	0	5
人工関節	0	3	3
日常生活の不都合	0	1	2
再手術	0	1	2
術後の心配	0	0	3
肥満	0	1	1

A群とB群は、8項目とも術前と比べて良好な反応が多く、社会役割、身体活動、不安、痛みの得点が高かった。最も得点の低い項目は社会活動であった。C群は他の2群と比べて痛み以外の7項目の得点が低く、有意差がみられた。特に、可動性、社会活動、抑うつ3項目は、術前と比べて変化なし、またはわずかではあるが悪化していた。

術前と比べた現在の健康感は、3群とも改善が最も多かった。悪化はA群にはみられなかったが、B群に1名、C群に4名みられた。手術の満足度は、とても満足が3群とも60%以上であった。失望はA群にはみられなかったが、B群に1名、C群に3名みられた。健康感と手術の満足には差がみられなかった。

健康感について悪化と答えた5名の平均年齢は63.6歳、疾患は変形性股関節症4名、慢性関節リウマチ1名であった。日常生活関連動作得点は24~31点、QOLは、痛み以外の得点が低く、-26~3点であった。

5. 生活のとらえ方別股関節の気がかり

生活のとらえ方別股関節の気がかりを表3に示した。股関節に関する気がかりがある者は、3群とも過半数を占め、特にC群は72%であった。内容では、術部または他の関節の痛み、耐用年数、対側股関節への負担が多かった。

考 察

人工股関節置換術後は人工関節の磨耗を最小とする生活の自己管理が重要である。しかし除痛効果が大きく、長期経過例では、股関節に負担の多い生活を送っている者もいると考え、2年以上経過例の生

活調査を行った。今回の結果は、生活のとらえ方が現在の生活を主観的に最も端的に表現していると判断し、生活のとらえ方別にまとめた。

塩谷は、5年以上経過例をX線撮影から良好群と不良群に分け、杖は関節保護に有用であると述べている³⁾。杖使用の割合は、C群では過半数を占めたが、主観的に不都合を感じていないA群およびB群では約20%であった。一方、股関節に関する気がかりがある者は3群とも過半数を占めていた。このことより、今後は股関節の状態の客観的な把握を行い、個別的に具体的な生活上の注意点を指導することが必要と考えられる。

日常生活関連動作(特に正座、しゃがみこみ、座っておじぎ、バス乗降)の自立度が低い者は、C群に多かった。われわれは、これまでに、術後1年の日常生活動作得点の低い者について項目別に検討し、正座、座っておじぎ、しゃがみこみ、足指の爪切り、バス乗降の自立得点が低いことを報告した⁴⁾。今回の結果と比べると、足指の爪切り以外の4項目が一致しており、2年以上経過例にもあてはまることが確認できた。これらの動作は日本人の生活様式を考えると困難が多いと予測され、生活環境の改善などの工夫が必要と考える。

生活の満足度では、A群とB群の結果は術後1年の報告⁴⁾と同様に概ね術後肯定的な反応が多くみられた。また、今回の結果でも、3群とも社会活動の平均得点は最も低かった。今後、職業や年齢との関係を検討したい。健康感や手術の満足度の特に低い事例では、日常生活関連動作の自立度と生活の満足度も極端に悪いことから、個別指導の必要性が示唆された。

本研究の限界は、調査項目はすべて対象の主観的な回答であり、客観的な判断を加える必要があると考える。

今後は、例数を増やし、経時的な分析を加えて検討したい。

まとめ

術後2年以上経過した人工股関節置換術患者82名の日常生活関連動作、QOL、股関節に関する気がかりの現状を生活のとらえ方別に分析し、以下の結論を得た。生活をむずかしいととらえている者はなかった。約半数はなんとかやっているととらえており、うまくやっているととらえている者と比べて、日常生活関連動作の自立度と、痛み以外のQOLの得点が低かった。股関節の気がかりがある者は全体の過半数を占めた。以上から術後2年以上経過した人工股関節置換術患者の継続看護の必要性が示唆された。

本研究は平成4、5年度文部省科学研究費補助金(一般研究C, 課題番号04671450)の助成を受けたものの一部である。本研究の要旨は第20回日本看護研究学会で発表した。

文 献

- 1) 泉キヨ子 他: 人工股関節置換術患者における日常生活の回復過程に関する研究—術後12ヵ月のADLの回復とROMの回復の推移について—。金沢大学医療技術短気大学部紀要, 15: 67-71, 1991.
- 2) Selman, S.W.: Impact of total hip replacement on quality of life. Orthopaedic Nursing, 8(5): 43-49, 1989.
- 3) 塩谷彰秀 他: 人工股関節置換術の予後調査—5年以上経過例について—。中部日本整形外科雑誌, 28(1): 83-85, 1985.
- 4) 泉キヨ子 他: 人工股関節置換術患者の回復過程および生活の満足度に関する研究。日本看護研究学会雑誌, 17(2): 9-19, 1994.

Recovery Process in Daily Living and Quality of Life with Total Hip Arthroplasty

— Following up more than two years after THA —

Tomoko Hiramatsu, Kiyoko Izumi, Yasuko Suzuki,
Tadami Matsumoto, Kiyomi Kyunai, Chiyoko Katsuragi